

# 本多静六通信

第25号

発行  
本多静六博士会  
を顕彰する

## イチヨウにまつわる話数題と「森林家必携」覗き見

公益社団法人大日本山林会 副会長 桜井 尚武

■昨年は本多先生に関して色々なことがありました

本通信二十三号に寄稿された岡本貴久氏が、二〇一六年三月一日付で「記念植樹と日本近代—林学者本多静六の思想と事績—」という大部の単行本を思文閣出版から上梓されました。索引と掲載図版一覧のリストを除いて五四三頁の大部です。近代林学に膨大な業績を残した本多先生の活動を、先生が指揮された記念植樹に焦点を当て、先生の思想的背景にメスを入れながら詳細に調べて分析されたものです。本多先生が植樹という行為、とりわけ記念植樹に特別な意味を込めていたという分析は私にとって初めて知るもので

した。明治政府重鎮の牧野伸顕が企画推進した学校樹栽活動に「学校樹栽造林法全」を著してその推進に協力したことや、今日の全国植樹祭の前身である愛林日の推進に積極的に貢献したことも、本多先生の大きな業績であることを知りました。なお、この植林活動にアメリカのノースロップ氏 (Birdsey Grant Northrop、一八一七—一八九八、コネチカット州のプロテストアント宣教師にして同州教育局長、七十八歳時に来日、ついであるが札幌農学校の校長を務めたクラーク博士はノースロップ氏の推薦によるとあります) の助言が強く影響していること、ノースロップ氏はアメリカのみで

なく、日本やオーストラリア、カナダ、ヨーロッパに Arbor Day を広めた人なのだと知りました。

日比谷公園にある「みどりの①プラザ」が昨年の八月一日から十月十九日まで、「林学博士本多静六生誕150年展—日比谷公園も、明治神宮も—」という企画展示を行いました。「自らの人生を設計し、その通りに生きた本多先生」の誕生から昭和二十七年(一九五二)に逝去されるまでの足跡と業績を図表を使って事細かく説明したもので、出版物などの実物も展示して顕わしたものです。この企画に伴い「みどりの①プラザ企画展コンテンツブックシリーズ(H28①)」として、「林学博士本多静六生誕150年展」に展示した内容を詳細に記述したわかりやすい冊子を発行しました。

続いて、公益財団法人東京都公園協会の機関誌「都市公園24」(二〇一六年九月三十日発行)で、「特集本多静六生誕150年」と題して、「永遠の杜をつくり未来を生きる若者を育てた彼の人生哲学—という言葉の下、「本多静六生誕150年—林学・造園学・地域振興そして実践人生学—」、「本多静六の

公園計画論を読む」、「本多静六の人物像」、「100年先を見据えた明治神宮の森の造営」、「本多静六にみる都市美の理念と方法論—「植樹デー」と植樹の功德—」一考、「本多静六博士の精神を受け継ぐ埼玉県への取り組み」、「本多静六記念館の展示」、「本多静六博士をいまに伝える顕彰活動」、という記事を載せて、ここでも先生の足跡を詳細にたどる、関係者や権威の方々の記述が展開されています。

二〇一六年はこのように、本多先生のすべてを網羅する企画や作品が沢山発表されたということ、関係者各位には大変に興味のあった年であったことと思えます。

これまでの「本多静六通信」紙の報告には、専門家でないとならない本多先生にまつわる詳細な事実が事細かく報告されています。本多先生は大日本山林会におきましても理事として多大の貢献をされてきました。

### ■大日本山林会にみる本多先生

大日本山林会では、明治十五年(一八八二)以来発行し続けてきた機関紙「山林」の旧巻号の記事を検索し閲覧できるデータベース

の一般公開を昨年十月に行いました。この「山林」のバックナンバー検索するには、大日本林会のホームページ

http://www.sanrinkai.or.jp/top.htmlから会誌山林検索画面  
http://sanrin.sanrinkai.or.jp/#list\_navへ移って頂ければ利用できます。

試みに、「検索画面タイトルまたはカテゴリ」に本多静六と記入してリターンキーを叩くと、三十四件あると出力され、それぞれの発行年月日、タイトルが二十五件ずつ表示されます。あとはタイトルを指定すればpdfファイルによる全文表示結果が得られます。このデータベースについて、二〇一七年の一月号発行の本会の機関誌「山林」の年頭所感として田中潔会長が詳述していますのでご参考にしていただければと思います。本データベースからは、本多先生は158号（明治二十九年（一八九六））～799号（昭和二十五年（一九五〇））まで、執筆論文が掲載されていることがわかりません。先生の「山林」における執筆活動は、三十歳から八十四歳までの五十四年間の長期にわたって

ることがわかり、ここでも感嘆いたします。

■本多先生の著書、就中「本多造林学」と「森林家必携」

本多先生は大量の著作を発表しています。手元の資料によると「博士が著した著書は、一説に三百七十六冊。内訳は一般教養書五十三冊、造林学書三十冊、一般林学書二十八冊、公庭園関係書百二十六冊、全集・百科事典等の分担分三十五冊、旅行記その他百四冊等」とされています。これらの一部が前述の「林学博士本多静六生誕150年展―日比谷公園も、明治神宮も―」という企画展示と関連出版物で紹介されました。

本多先生を林学の学徒としてみると（小生です）、何といっても注目すべきものは本多造林学本論、同各論を始めとする造林学書です。当時入手できる新旧の情報を可能な限り収集し整理究明したものに、実際の森林調査や林業家の技術、実態の調査、これら情報の大学での試験・実験や新たな研究成果を加えて書き綴ったもので、現代の森林林業教科書としても充分に通用する中身だと思っています。日比谷公園の一角にある「みど

りの①プラザ」の先生生誕150年展を訪問したあと、レストラン松本楼の前の通称「首賭けイチョウ」を訪ねました（図1）。

「首賭けイチョウ この大イチョウは、日比谷公園開設までは日比谷見附（現在の日比谷交差点脇）にあったものです。明治三十二年頃、道路拡張の為、この大イチョウが伐採されようとしているのを見て驚いた日比谷公園生みの親、本多静六博士が東京市参事会の星亨（ほしとおる）議長に面会を求め、博士の進言により移植されました。移植不可能とされてい

たものを、博士が『首にかけても移植させる』と言って実行された木なので、この呼び名があります」という説明板が添えてあります。

「柵内の立ち入りはご遠慮ください」と書いてあるので、残念ながら大きな実測しませんでした。が、目通り直径は1m以上、樹高も20m以上になっている大きな木です。

■イチョウの話

このイチョウという樹種について、本多先生の記述を見てみましょう。

イチョウの説明は、「造林学各論第壹篇針葉樹篇」に載っています。この本は六九八頁の大部で、三浦書店版、ここで見たのは第十一版で大正八年（一九一九）発行のもので、本多先生は一八六六年生まれなので、三十二歳の時に執筆上梓したものです。

同書の六〇八頁から「第73いてふ」の記述があり、いてふは針葉樹と書いています（イチョウの葉はマツやスギと違って広いので、葉樹という人がいるので、



図1. 首賭けイチョウ、手前の人と比べると大きさがわかる

針葉樹とする見解が多数と指摘し  
たくて本書の記述を紹介しまし  
た)。

林業上の性質として、「1総説…  
大造林の見込みなきも庭園樹、行  
道樹、日除樹として栽培の見込み  
有。且つ、果実生産の目的におい  
ても栽培を得べし」としています。

栽培法として、「葉は落葉にして  
…、雌雄異株にして苗木の雌雄区  
別法は雌は雄に比しその形低く太  
く横枝多く、葉は小さく且つ、葉  
に裂け目少なく、秋季の黄変は雄  
は雌より遅し。又種子の区別法は、  
雌は雄より丸味多しと云う」。さ  
らに、「二十年生にして結実し高年  
に至るも尚多量の実を結ぶ(六一  
〇頁)」と書いています。そして、  
この次に重要な記述があります。

すなわち、「深根性にして萌芽性強  
く活着容易なれば如何なる老樹も  
移植に耐ふ(六一〇頁)」。

日比谷交差点脇にあったのを日  
比谷公園の中へ植え替えたという  
首賭けイチヨウ、その時期は明治  
三十二年(一八九九)といえます。  
先生には移植成功を確信できる根  
拠があったものと言えます。

この樹種は造林目的を達するの  
は難しくないとした上で、「只ス

ギ・ヒノキ又はケヤキ、クスノキ  
等に対して林業上有利なるや否や  
は疑問なり」と書いています。こ  
れは実際の木材流通の現状を見て  
の判断と思われます。つまり、例

示したイチヨウ以外の樹種の用途  
が明確で実際に使われているのに  
対して、イチヨウの利用実績が乏  
しいということでしょう。現在に

おいても、俎(まないた)等板材  
として適するという記述はあるも  
の、実際の市場にはまず見られ  
ません。造林事例も乏しくて、森  
林総合研究所多摩森林科学園に小  
規模の植栽林がありますが、単木  
や並木植栽木が大きな樹幹を呈し  
ているのに比べて細く貧弱なのが  
目立ちます。林分状に栽培した場  
合は個体成長、特に直径の肥大成  
長が抑えられて期待する大きさに  
育ちにくいとか単位面積当たりの  
収量が少ないという懸念が、これ  
まで造林実績に乏しい本種という  
ことに加えてあるのではないかと  
思います。

■イチヨウの雄木と雌木の区別

イチヨウの果実、銀杏の需要は  
一定程度期待できるので、それを  
考慮しての栽培のための記述は続  
きます。

「取り播きにおいてはその肉の  
附着したまま播種すべし(六一四  
頁)」、「三年目の春、即ち満三年に  
至り三尺の長さになりたるものを  
山地に植うべし」、「この区別した

雌実丸みを帯び雄実細長な  
り。これを区別して雄一本に付き  
雌二十本の割合に植うれば最も多  
くの種実の収穫あるべし(六一五  
頁)」。

ここまで記述で、先生は  
種子の形状から発生する個体の雌  
雄は区別できるとしてはいますが、  
このことについての実際を私は知  
りません。種子の形に着目して実  
際に発生する苗の雌雄を区別する  
ことができるのか否かは、実際の  
実験結果を得るまでは納得できな  
いのですが、私は今までの所その  
ような報告を知らないで何とも  
言えません。これまでみた文献で  
は、実際に種子がなつて初めてそ  
の木が雌樹であると判別すること  
ができるということでした。

首賭けイチヨウが雌樹か雄樹か  
を確認するために昨年十一月十六  
日に日比谷公園を再訪しました  
(この稿の写真は全てこの日に  
撮ったものです)。果実が落ちてし  
まっている時です。首賭けイチヨ  
ウの周辺に果実は見つかりません

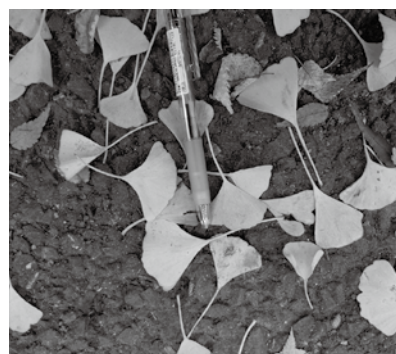


図3. 首賭けイチヨウの落葉、切  
れ込みの少ない小さな葉が沢山



図2. 首賭けイチヨウの根本の周り  
の落ち葉。ギンナンはありませんでした

(図2)。つまり雄樹ということ  
です。前述したように、本多先生の  
いてふの項には「雌は雄に比しそ  
の形低く太く横枝多し。葉は小さ  
く且つ、葉に裂け目少なく、秋季  
の黄変は雄は雌より遅し」とあり  
ました。この時撮った写真に見る  
ように、首賭けイチヨウの葉は小  
さく、黄変していません。亀裂は深  
くありません(図3)。

噴水のある西洋庭園の外周にイチョウ並木があり、無残に剪定されてしまったイチョウの並木があります(図4)。この一つはギンナンを落下させている雌樹でした。その樹下にある果実と葉の写真ですが(図5)、緑色の葉で切れ込みが大きいのがわかります。



図4. 西洋庭園外周の無残に剪定されたイチョウ並木



図5. 図4の樹木の根本に落ちていたギンナンと切れ込みの深い緑葉

葉の切れ込みは大きく秋季の黄変は雄樹より遅い雌樹ということ、本多造林学のいてふの記述とは異なる結果でした。わずかに一樹ずつの観察であり、本多先生の記述では若木とあるのに対して壮齢樹あるいは老齢樹の事例ですから大した根拠にはなりません、少なくとも本多先生の記述が絶対とは言いいられない事例です。雌雄区別のことについては今後の実験結果を待つ必要があるでしょう。

#### ■「森林家必携」のこと

本多先生の業績の中で、実務に携わる林学者・林業家に知られているものが「森林家必携」です。「本多静六通信第23号」十二頁に久喜市教育委員会の渋谷克美氏が、本多先生が大日本山林会に通い、著作の執筆の傍ら「森林家必携」の改定作業に携わっていたことを紹介しています。林科の学生時代にこの小冊子を持って国有林のアルバイトに出かけて、一端の専門家気取りで作業をしたと懐かしく語る先輩がいました。

この「森林家必携」は、明治三十七年(一九〇四)八月二十六日初版発行ということ。初版本の緒言を要約して示すと以下の様で

す。

「かつて見聞事項を要覧メモとし粹を集めてこれを一帳に記入し、学海指針と名付け利用した。それを友人に勧められ、畏友の助けを得て公にしたものである。科学の進歩は歳に新にして余が十余年前の知識は既に陳腐化したものが多いため堀田綱島両君に請うてその斬新なる知識でもって専門事項の編集を託し公にできた。本書は林学者林業家の日常携帯用に薄質の良質紙に細字密植にした。(明治三十七年(一九〇四)八月二十五日)本多静六誌す」。

この、初刊本の目次と収録頁数は以下のようです。

- 第I篇…樹木要覧(九五頁)
  - 第II篇…造林/保護(七九頁)
  - 第III篇…数学(一一二頁)
  - 第IV篇…森林利用(土木—林産製造(五一頁))
  - 第V篇…雑(統計、気象、鉱物、地質、土壤、農業理水、法規)(八四頁)
- 以上合計四三〇頁。

第I篇の樹木要覧に続く第II篇の造林保護の冒頭に、「林学の義解及び分化」として予科・本科・補

助科の構成とその原理が説かれています。引用すると以下の様です。

「林学とは最も有利なる方法を以て林業を行い、森林及其の産物をして直接又は間接に、吾人の使用に最も適当ならしむるの理論及方法を講究するところの学なり。換言すれば、林業をして最も利益有らしむるには(有形に又は無形に)、如何にこれを行うべきかの問題に就いて、其理論と方法を論究するものなり」。

そして、予科では「1. 数学(測量を含む)、2. 物理学、3. 化学および応用化学、4. 動物学、5. 植物学、6. 地質学、鉱物学、土壤学、7. 気象学、8. 経済学。

本科では1. 造林学、2. 森林保護学、3. 森林利用学、4. 測樹学、5. 森林経理学一名森林設計学—附林価算法及森林較利学、6. 森林管理学、7. 林政学。

補助科では1. 財政学及応用経済学、2. 警察学及統計学、3. 法律学大意、4. 農学大意、5. 工芸学大意、6. 養魚学、7. 狩猟学(全然林学の一部と見做さるることあり)があると体系表で説明しています。

林学を教授する体系を描いて教育に掛ける意気込みが窺えます。現代では生態学（生物多様性）や分子生物学（遺伝子工学）などの新しく発展した研究分野が加わっているものの、この体系の基

本は大きくは変わっていません。主要樹種の造林上の技術の記載とともに、外国樹種についても、オレゴンマツ、ローソンヒノキ、鉛筆ビヤクシン、ヒマラヤシダー、ストローブマツ、リギダマツ、海岸松、ニセアカシア、アメリカヤマナラシ、チーク、チューリップツリー、マホガニー、シタン、コクタン、白檀、沈香の十八種を挙げていて、その材質効用、郷土適地、成長特性、造林法とその時の

注意事項を記述していて、海外に目を向けているのがわかります。■「森林家必携」にみるかつての植物の科名の妙と「南洋植物要覧」

第I篇の樹木要覧には、科レベルでみると、裸子植物門は六科、被子植物門の双子葉植物綱離弁花亜綱には六十六科、合弁科亜綱には十八科、単子葉植物綱には四科が掲載されていました。それぞれの科単位に樹種が整理され、和名学名（ラテン語名）、異称、形態説

明、分布範囲、時には用途が記載されています。当然のことながら当時は現在と違う科名が使われています。しかも漢字です。私の知らないもの、読めない科名などもありましたが、そうそうこの漢字を宛てるんだよねと納得できるものが多数ありました。以下にそれらの一部を列記してみましよう。

ブナ科は穀斗科、イラクサ科は蕁麻科、カツラ科は雲葉科、フウチヨウソウ科は白花菜科、ユキノシタ科は虎耳草科、トベラ科は海桐科、マンサク科は金縷梅科、ミカン科は芸香科、センダン科は棟科、トウダイグサ科は大戟科、モチノキ科は冬青科、カエデ科は槭科、クロウメモドキ科は鼠李科、シナノキ科は田麻科、ヒルギ科は蛭木科、フトモモ科は蒲桃科、ツツジ科は石南科、ヤシ科は芭蕉科という具合です。

最近の版に比べて外国樹種の記載は少なく、フタバガキ科は設けておらず、フトモモ科についてもユウカリ類の一般的記述があるにすぎません。しかし、「森林家必携」とは別に、本多先生は「南洋植物要覧」とい

う「森林家必携」と同サイズの一六〇頁の冊子を帝国森林会蔵版として昭和十七年（一九四二）四月に同じ三浦書店から発行しています。これの前書きだけを以下に転記して内容の紹介に代えます。「緒言 大東亜共栄圏の進展に伴いその重要資源たる南洋植物の研究は蓋し緊要なる問題である。本会は夙に南洋の研究と植物の実地試験とを行いつつあるが今回新たに南洋資源の開発研究に便せんがため多年調査蒐集せる資料に拠り南洋植物要覧を編纂することとせり。乃ち林業試験場技師理学博士川村実平、同技師理学博士松島鐵也、ドクトル本郷高德、原田寛二の諸氏の分担調査と、これが整理校正を林学士和田義正及び鈴木清次の両氏に委嘱し、予はこれを通読添削したるものにして、元より全責任は予の負う處なるも、発刊を急ぎし関係上、不行届又は誤謬の点少なからざるやを憂ふるものである。切に大方の是正を乞ふと共に後版にその完成を期せんとするものである。昭和十六年十一月三日 帝国森林会会長 本多静六」

# 「生誕百五十年記念誌」を刊行

平成二十九年三月、本会では本多静六博士の生誕百五十年を記念して、「生誕百五十年記念誌 本多静六・森と公園を愛した人」を刊行しました。



A四版四十八頁、オールカラー刷りで、博士研究者らの特集記事をはじめ、各分野の方々からの随筆を収録しています（執筆者15人）。博士の業績や人柄を知る貴重な資料といえます。

本会では記念誌を希望される方に無償頒布しておりますが、頒分場所や請求方法等詳しくは左記までお問い合わせください。

本多静六博士を顕彰する会代表 柴崎 一  
〒3460105 埼玉県久喜市菟浦町新堀  
484-3、又は久喜市菟浦総合支所総務管理課 電話0480-851111(代)まで

# 生誕百五十年記念 林学博士本多静六賞

埼玉県浦和競馬組合副管理者 高山次郎



## 一 冠レース

埼玉県浦和競馬組合（管理者

上田清司埼玉県知事）は、平成二

十八年八月十日から十二日の三日

間、さいたま市南区大谷場の浦和

競馬場で「夏休みシリーズ」を開

催しました。八月十一日は、祝日

法の改正により新しい国民の祝日

となった「山の日」でしたので、

メインの第十一レースははずばり

「山の日特別」とし、第十二レー

スは「甲武信ヶ岳特別」、第十レー

スは「両神山特別」と埼玉の山に

ちなんだレース名としました。こ

の日のスポーツ紙には五本の馬柱

が立つことになっていました。馬

柱とは、勝馬を予想する縦書きの

囲み出走表のことです。埼玉新聞

やスポーツ新聞、競馬専門紙に

レース名が記載されるばかりでな

く、場内の大型映像装置、加えて  
勝馬投票券（馬券）にもレース名  
が印刷されます。実況中継でも音  
声が流れます。全国に発信が可能  
です。埼玉と山に関係するうまい  
名前がないものか、あと二つと、  
思案しました。

昭和五十七年（一九八二）にエ  
ベレストからの下山途中で遭難し  
た大宮出身の登山家、加藤保男氏  
がいます。彼は浦和競馬場でラー  
メンの出走などして資金を貯めて  
山に登っていました。大宮市「市  
民栄誉賞」も受賞されています。

「登山家 加藤保男賞」を第八  
レースに組みました。

もう一つは、「生誕150年記念 林  
学博士 本多静六賞」として第九  
レースに組みました。山の日  
「山に親しむ機会を得て、山の恩  
恵に感謝する日」だそうです。私  
にとつての山とは登山（レジャー）  
というイメージよりも、すべての  
生命の源、守るべき緑、自然の象  
徴との思いが強かったので、埼玉

の偉人「日本の森林を育てた人  
本多静六博士」を、ぜひこの機会  
に多くの人に知ってもらいたいと  
考えました。

この日は快晴で暑い日でした。  
午後三時五十五分に発走した第九  
レースは、藪口一麻厩舎所属のゲ  
オグラファイア号が岡田大騎手の騎  
乗により一着でゴールしました。  
浦和馬、浦和騎手の勝利です。

レース実況では、場内のビクト  
リービジョンに映像が流れ、本多  
静六博士の偉業がアナウンスされ  
ました。日本最初の林学博士、公  
園の父と呼ばれる埼玉県久喜市  
（旧菖蒲町）出身の本多静六博士  
を全国に発信することができ、博  
士生誕百五十年の記念になったも  
のと思っています。

## 二 浦和競馬場

浦和競馬場は、昭和二十三年  
（一九四八）七月の競馬法の改正  
により、地方公共団体の主催とし  
て同年九月に全国初の競馬を開催  
した歴史ある競馬場です。JR南  
浦和駅から無料送迎バスで五分、  
JR浦和駅からも歩いて十五分ほ  
どの距離にあります。周囲は住宅  
街に囲まれ、場内には一級河川の



浦和競馬内での展示のようす



浦和競馬 実況写真



調整池として機能する浦和競馬場

とうえもんがわ  
 籐右衛門川が北から南に流れ、洪水調節池としての機能も持っています。さいたま市道が二本場内走路を横断しており、馬場内は公園として、ソフトボール場、ジョギングコース、芝生広場などの他、さいたま市の健康運動器具なども設けられています。浦和での競馬開催がない日には、子どもたちが元気に芝生広場を駆け回り、赤ちゃんからお年寄りまで多くの皆様にご利用いただいております。さいたま市からは広域避難場所としての指定を受けており、ヘリポートや水、食料、毛布などを備えた防災備蓄倉庫も設置されています。また、近隣自治会と合同で

の防災訓練を実施したり、地元南区の「ふるさとふれあいフェア」の会場としてもご利用いただいております。昨年十一月五日のフェアには五万八千人のご入場がありました。

馬場の中央の緑地も水害時の調節池となっており、昨年八月二十二日の台風では一面の湖となってその機能を発揮しました。浦和競馬場は、地域に根ざし、地域コミュニティに溶け込んでいることが大きな特徴だと思います。

そんな地域連携の取り組みとして、年間十二回程度の浦和本場開催に当たっては、さいたま市をはじめ県内市町村などとタイアップして、地域の観光PRや特産品の販売促進を行っています。平成二十八年の四月は「さいたま市シリーズ」、五月は「北埼玉地区シリーズ」、七月は「秩父フェスタシリーズ」でした。そして、八月の「夏休みシリーズ」の中で、八月十一日、山の日にちなんだ名前のレースが組まれたものです。

### 三 第三十七回全国育樹祭

私が本多静六博士に強く関心をもったのは、平成二十五年十一月

に埼玉県で開催した第三十七回全国育樹祭がきっかけでした。「育てよう みどりは未来の たからもの」をテーマに、十一月十六日にお手入れ行事を寄居町の金尾山で、翌十七日に式典行事を熊谷市のくまがやドームで行いました。

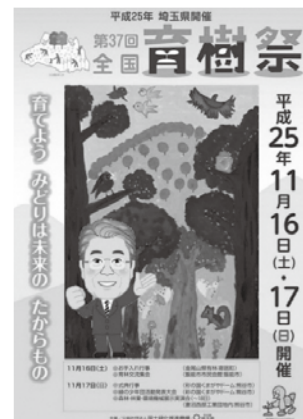
埼玉県で育樹祭を開催するに当たり、埼玉らしく何をアピールできるだろう、どうすればよいのだろうと悩みました。緑を守ってきたのだから、開発で緑を失ってきた半世紀ではなかったのかと。いや、今埼玉は緑の再生に力を入れている。森林を守り育て未来につなげようとしっかり取り組んでいる。その姿を素直に見せればよいのではないか。埼玉には本多静六博士がいたではないか。その遺志を継いで埼玉県は様々な取り組みを進めているのではないか。開催方針にはこう書きました。

〔前略〕また、明治から昭和にかけて活躍した本県出身の本多静六博士は、日本初の林学博士であり、大宮公園や日比谷公園など全国各地の都市公園の設計を手がけ、人々に身近な憩いの場を提供しました。

しかし、時代の流れとともに身



第37回全国育樹祭 メインテーマアトラクション「日本の森を育てた人」の一場面



育樹祭宣伝用名刺・裏面







博士の母校三箇小学校に漫画を贈呈。中央は高砂校長（当時）



日比谷公園「首かけイチョウ」の前で左から著者、遠山先生、比古地先生、埼玉新聞社 小川社長



学習まんが「本多静六博士物語」

習まんがはこうして生まれました。「日本の森林を育てた人 本多静六博士物語」です。

原作・監修は、お茶の水女子大学名誉教授（生物学）で、本多静六博士のひ孫に当たる遠山益先生です。本多静六博士の縁戚にあたります。先生には、育樹祭のメインアトラクション「日本の森林を育てた人」の制作にも深く関わっていただきました。

漫画は、秩父市生まれの漫画家比古知朔弥先生です。秩父地域の情報を発信する「ちっちゃ倶楽部」を主宰するなど秩父を中心に活動されています。

漫画は、平成二十七年一月二十二日から毎週木曜日、六回にわたってタブロイド判八頁の埼玉新聞第二部として折り込まれました。

冊子は、同年三月に発刊され、埼玉県内の小学校八百七十七校、中学校四百五十校、県内公立図書館等二百二十四か所、久喜市ほか県内市町村に配布しました。本多静六の母校である久喜市立三箇小学校には、当時県農林部だった私が直接届けました。少年時代の本多静六博士が通った河原井小学校は

現在の久喜市立三箇小学校にあたります。学校の玄関の前には博士ゆかりの「寄せ植えの松」があります。その松の前で校長先生と記念写真を撮らせていただきました。

同年九月二十九日付の埼玉新聞は見開きの特集を組みました。環境キャンペーン「学習まんがで知る埼玉の偉人『本多静六博士』で学び広がる」です。三箇小学校に取材したその特集の一節を借りて駄文の結びといたします。

「児童とともに教師も学ぶ自ら行動する姿に感銘 『実は、私も児童と一緒に博士について学びました』という川島先生は、今春母校に赴任してきたばかり。博士の名前は知っていたものの、業績や生涯については詳しくなかった。児童と学ぶ中で学習まんがに教師として気づかされたことがあるという。『印象深いのは大学演習林の話で、重労働に音を上げた学生たちが、率先して行動する博士の姿にやる気を取り戻す場面があります。指導するばかりで自ら行動する姿を児童に見せているだろうかと、気持ちを新たにしました』

### コラム 本多静六が目指した「楽園生活」

本多静六は、昭和九年（一九二〇）十二月、数え年で七十歳・古希を迎えるにあたり、「楽園日記」と名付けた日記を毎日書くことを決心するとともに、楽園生活の信条を次のとおり書き綴りました。これからの高齢化社会を生きる私達にも参考となるものではないでしょうか。

#### 楽園生活の信条

- 一 天国又は極楽生活を現実に営むこと。但し経済生活に関する限り、現社会の中流生活を基礎におくこと。
- 二 名利を超越して専ら趣味と愛とに努力精進すること。見えや儀礼や習慣に捕われず、子供のよう自然の俤に無憂無碍に、悠々自適すること。
- 三 経済は前年度の実績により、翌年度の収入を予算し、それを四分経済法（二分は公税・寄付その他社会奉仕用、一分は基金に組み入れ、一分は主婦に任せて家庭生活費に充て、一分は図書・集会費その他主人の小遣いに充てる）に分けて、必ず予算以内で生活すること。

## 本多静六生誕百五十年と日比谷公園

公益財団法人東京都公園協会緑と水の市民カレッジ事務局 大場 由佳子

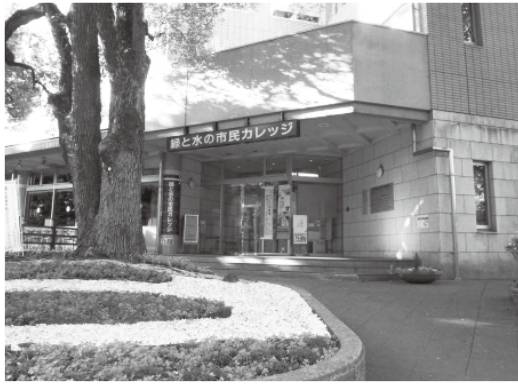
### ■はじめに

日比谷公園が誕生してから百十余年経過しました。

現在の緑豊かな公園の姿を、本多静六博士（以下、本多博士）は想像していたでしょうか。

日比谷公園にある緑と水の市民カレッジ（以下、カレッジ）とは、「緑と水」に関する知識や技術を学習する場を提供する総合学習施設です。

今年度のカレッジでは縁ある本多博士にちなんで「本多静六生誕



日比谷公園にあるカレッジ建物外観

百五十年」をテーマに掲げ、一般市民向けの講座、専門誌『都市公園』での特集、みどりの①プラザでの企画展示を行いました。

### ■本多静六博士を伝える緑と水の市民カレッジの事業

まず、平成二十八年五月二十七日には岡本貴久子先生（国際日本文化研究センター共同研究員）に「本多静六と都市美運動―植樹デー」の講座をお願いしました。

今では、植樹というと多くのところで小さな苗木を植えますが、本多博士の活動では成木を植樹することもあったそうです。美的外観を整えることが大切だとの考えで行っていたそうです。

また、平成二十九年一月十四日、二十八日には濱野周泰先生（東京農業大学教授）に「先人たちが造った明治神宮の森」として教室での座学と現地の明治神宮の森を見ながらの講座をお願いしました。

どちらも熱心に耳を傾ける受講

生が多く、明治神宮の計画の壮さや本多博士の功績を実感していただけたと思います。

公益財団法人東京都公園協会（以下、当協会）では昭和三十一年（一九五六）から公園緑地に関する専門誌『都市公園』を発行しています。約六十年に及ぶ歴史ある雑誌であり、東京都の公園緑地行政の貴重な記録を重ねてきた雑誌です。

平成二十八年九月号発行の『都市公園』では、「特集・本多静六生誕百五十年」と題し、総論を進士五十八先生（福井県立大学学長・東京農業大学名誉教授）、本多博士の公園計画論を小野良平先生（立教大学教授）にご執筆いただきました。他にも多くの方にご執筆頂き、本多静六博士を顕彰する会の柴崎会長にもご執筆いただきました。

また、本多博士の遠戚である遠山益先生（お茶の水女子大学名誉教授）にご執筆並びに貴重な写真をお借りし、今まで見たことのない本多家の家族写真を口絵ページに掲載することができました。本多博士は研究のため全国へ飛び回り、忙しい身でありながら、家族

との写真を多く残しています。子ども時代に父親を亡くした苦勞から、家族を大切にしていたことがそれら写真から伝わってきます。明治時代の方でも意外と写真が残っており、本多博士は新しいことがお好きだったのでしよう。

### ■みどりの①プラザで開催した『本多静六生誕百五十年展』

もう一つ、緑と水の市民カレッジでは本多博士をより深く知って頂くためにみどりの①プラザで「本多静六生誕百五十年展―日比谷公園も、明治神宮も―」を平成二十八年八月一日～十月十九日まで開催しました。

展示の監修は進士五十八先生にお願いし、本多博士をスターにしよう！とお引き受けくださいました。

制作に約二か月弱と時間のない中で、本多静六記念館や久喜市役所、大日本山林会など多くの方にご協力いただきました。この場をお借りし、お礼申し上げます。

展示期間は約二か月半でしたが、多くの方にご来館いただきました。その数、約三千八百人。特に初めてカレッジへ来館された方が多く、

本多博士の人気の高さに改めて驚きました。

本多静六博士については現代の私たちがイメージするのは、明治時代の頑固なおじいさん（失礼）というイメージですが、調べれば調べるほど人間味あふれるエピソードがたくさんありました。

みなさまよくご存じかもしれませんが、少しご紹介します。



上：みどりの①プラザで開催した「本多静六生誕150年展」のようす 右：「本多静六生誕150年展」ポスター

その一、

本多博士も外で元気に遊ぶわんぱくなガキ大将で、寺子屋に生えるサイカチの木に登り、枝の上にある巢にいるカケスの子を取ろうとして親鳥の逆襲にあい、木からすべり落ち、寺の和尚に「小鳥でも子を護るため身体を張る、人間の親も一緒、親に心配をかけるようなことはするな。」と戒められました。

その二、

苦学生時代に天井をご馳走になり、この世にこんなに美味しいものがあるのか！と感激し、いつか二杯食べてやろう！と心に決めましたが、実際に成し遂げられるとそれほどおいしくなかったとか。その後、無類の天ぷら好きとなり、友人を招いては天ぷらパーティーを開催したそうです。

その三、

本多博士のドイツ留学時代、ミュンヘン大学での提出レポートは必ず「積極案」「消極案」「折衷案」を提出したそうです。そのように心がけたことで、処世術と柔軟な考えを身に着け、日比谷公園設計に関わった際に国の重鎮たちとも共に渡り歩けたのかもしれない。

ません。

展示の期間中には映像ルームで『学問と情熱 第三十五巻「本多静六」』（紀伊國屋書店）を上映しました。一回の上映時間が四十分と長いのですが、熱心にご覧になる方が大勢いました。また、この映像の中には本多博士の肉声が二か所収められています。本物の声を聞くと、本多博士の人となり、がより身近に感じられました。

■本多博士のスケールの大きさ

現代の私たちはすぐに「都市緑化」などという言葉を使いますが、本多博士の時代は身近には当たり前前に緑がありました。

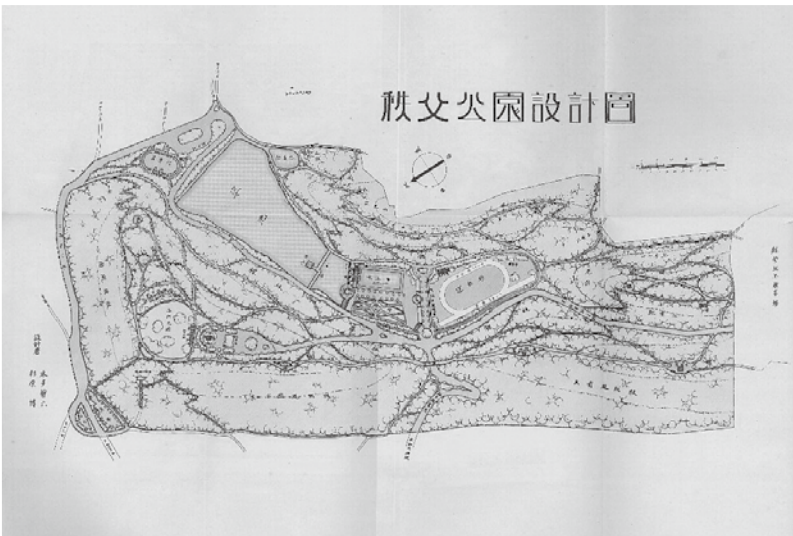
本多博士が見ていたのはもつと大きな視点で、国家としてどうあるべきか、国民はどう暮らすべきか、という視点だったと考えられます。

本多博士は明治の終わり頃から全国に公園計画や風景利用策を説く講演

会などを行います。

”いやしくも木が二本以上並んでいるところは、すなわち『林』の字で、林学者の頭と腕をかすべき領分だ”として「観光」を視点にした地域発展策についての指導・提言も観光地や温泉等各地で繰り返していました。

その根底にある考え方が「風景利用」と「独立自強」です。「風景利用」とは豊かな自然を



秩父公園設計図：秩父公園は羊山公園の一部となっている

### 第4章 / 勤労期 国土的スケールのオピニオンリーダー ③ 全国各地に残る地方創生の足跡

日比谷公園の評判から、本多には全国から公園改良・設計依頼が殺到します。本多が手がけた公園で、今日にも残っているのは70箇所以上にのぼります。

一方で「いやしくも木が二本以上並んでいるところは、すなわち「林」の字で、林学者の頭と腕をかすべき額分」と「観光」を視点にした地域発展策についての指導・提言も、観光地や温泉地等各地で繰り広げられていました。

「長野県須坂町公園完成当時の様子」 地方 須坂市 臥龍公園

「有馬温泉遊覧地図」 「森林公園・有馬温泉風景利用策」(大正5/1916)より

「東島公園全圖(第二編)」 東京人文学堂・農学生命科学研究所森林科学専攻・森林風景計画学研究室

「日比谷公園設計圖」 「日比谷公園設計圖(複製)」(昭和11/1936)より

「日本の公園の父 本多静六」(本多静六博士顕彰事業実行委員会 平成16/2004)より 武蔵野賞林、東京理科大学に全国各都府県

\* 日本地図は、本多静六の活動紹介用のためのものであり、すべては表記していません。

**北海道**

- ①春輝公園(釧路市)
- ②室蘭公園(室蘭市)
- ③大沼国定公園(七飯町)

**山形県 / 宮城県 / 福島県**

- ①温泉温泉改良私見(鶴岡市)
- ②松島公園(松島町)
- ③鶴ヶ城公園(会津若松市)

**栃木県 / 群馬県 / 茨城県**

- ①日光風景利用策(日光市)
- ②伊香保温泉の新経営(那珂川市)
- ③敷島公園(前橋市)
- ④種々園(水戸市)

**埼玉県 / 千葉県 / 神奈川県**

- ①森林公園と東秩父(秩父市)
- ②羊山公園(秩父市)
- ③飯沼遊園地(飯沼市)
- ④大宮公園(さいたま市)
- ⑤清水公園(野田市)
- ⑥南宮園地公園(鶴川市)
- ⑦大宮公園(大宮町)
- ⑧箱根風景利用策(箱根町)

**新潟県 / 長野県 / 山梨県**

- ①村杉温泉風景利用策(野沢新町)
- ②城山公園(飯山市)
- ③山ノ内温泉風景利用策(山ノ内町)
- ④臥龍公園(須坂町)
- ⑤種々園(小津市)
- ⑥磐井加地園地(磐井沢町)
- ⑦天竜峡風景利用策(飯田市)
- ⑧遊龍公園(甲府市)

**石川県 / 福井県**

- ①卯辰山公園(金沢市)
- ②芦山公園(越前市)

**岐阜県 / 愛知県**

- ①養老公園(養老町)
- ②岐阜公園(岐阜市)
- ③海蔵公園(清見町)
- ④中村公園(名古屋)
- ⑤鶴舞公園(名古屋)
- ⑥日本フイン風景利用策(犬山市)
- ⑦定光寺公園(瀬戸市)
- ⑧岡崎公園(岡崎市)

**静岡県 / 奈良県 / 和歌山県**

- ①大津森林公園(大津市)
- ②奈良公園(奈良市)
- ③和歌山公園(和歌山市)

**大分県 / 宮崎県 / 鹿児島県**

- ①由布院温泉風景利用策(由布市)
- ②青島探検利用策(宮崎市)
- ③鹿児島公園(鹿児島市)

**兵庫県 / 大阪府**

- ①城崎温泉改良策(豊美市)
- ②有馬温泉風景利用策(神戸市)
- ③箕面公園(箕面市)
- ④住吉公園(大阪市)
- ⑤浪寺公園(堺市)

**鳥根県 / 広島県 / 山口県**

- ①城山公園(松江市)
- ②赤松城風景利用策(庄原市)
- ③広島市の風景利用策(広島市)
- ④岩国風景利用策(岩国市)
- ⑤日和山公園(下関市)

**福岡県**

- ①柳井公園(北九州市)
- ②清浄公園(北九州市)
- ③大津公園(福岡市)
- ④東公園・西公園(福岡市)

日本全国にある本多静六博士の関わった公園や風景利用策の一部をパネルで紹介

先日、北海道の室蘭公園がどこ

利用して人々に広く開放し、健康や教養に資する施設を整備するもの、また「独立自強」は人の世話にならず、独自の力で幸せな生活を確立するという人生哲学ともいえるもので、「健康でなければならず、清浄な空気、充分な日光、新鮮で美味しい食べ物が必要である」との考えを元に行っています。

本多博士は地方発展策を提言するために、講演会の時間より早く現地に到着し、まずその土地の商店で買い物をし、品揃えや物価の調査をしたそうです。その土地の特徴をすばやく把握し、地元の人たちが愛着を持ち、後世に残していけるものを目指していたのかもしれない。

**■公園を日本の文化にした全国に残る足跡**

本多博士が手がけた公園の中で、最も有名なのは日本初の近代式洋風公園である日比谷公園だと思えますが、実は本多博士は全国に約二百の公園を手がけたと言われています。その中で約七十カ所以上が現在も残っていると言います。

にあつたのか調べたいとレファレンスがありました。当図書館にある本多博士が全国に残した公園計画及び風景利用策等の所蔵資料から室蘭公園の計画資料をご覧いただきました。土地勘のある方だったので、すぐに場所が分かった様子でした。今はその場所には公園はないそうで、なぜなくなったのか、実際に公園は本当に造られたのか調べてみたいと言って帰られました。

本多博士が全国各地に残したこれらの足跡は、私たちが健康に暮らすために本多博士が働きかけて残してくれたのだと思います。

**■終わりに**

”文化とは人の営みが時を経て作り上げてきたこと”とすれば公園は今や文化として人々に受け入れられています。そしてその種まきをしたのが本多博士です。

本多博士が私たちに残した功績は非常に大きく、意味のあるものであったと伝えるために、緑と水の市民カレッジでは緑に関する情報を発信し続けていきたいと思えます。

### 第九回本多静六賞 受賞者のご紹介

埼玉県農林部森づくり課  
主査 山崎 宏剛

#### 一 第九回本多静六賞について

県では、本県出身で日本最初の林学博士となった本多静六博士の精神を受け継ぎ、緑と共生する社会づくりに貢献した個人・団体を、平成十九年度から表彰しています。第九回本多静六賞については、計十三件の応募があり、「お菓子な郷推進協議会」が受賞されましたので御紹介します。



お菓子な郷推進協議会の皆様

#### 二 「お菓子な郷推進協議会」の 沿革と功績

##### ○沿革

「お菓子な郷推進協議会」(以下、「協議会」)は、秩父地域に自生するカエデの多用途多目的開発及び植樹を目的として、平成十五年に秩父市内の十六の菓子業者が集まり設立されました。

##### ○功績

協議会では、「森を育てて、お菓子を創る」をスローガンに、秩父地域に自生し、秩父市の市木であるカエデから樹液を採取し、国産メープルシロップ(秩父カエデ糖)を生産しています。また、この秩父カエデ糖を用いて様々なお菓子を創出するなど、林業と商業の協働による林商工連携事業に取り組み、地域の活性化に貢献しています。

これらのお菓子は、世界食品オリピックのモンドセレクションに出品したところ、平成二十年から三年連続で金賞を受賞するなど、海外でも高い評価を得ています。

一方、持続的にカエデの樹液を活用するため、スギやヒノキの森林を間伐した後にカエデを植樹し、荒廃した森林を針広混交林として

再生するなど森づくりに貢献しています。

この活動では、平成十七年からこれまでに九千七百本が市有林等に植樹されています。

また、秩父地域の特性を生かした商品開発を進めるため、カエデ酵母菌やカエデ炭の活用研究を行うなど、カエデの多用途研究及び事業化に取り組んでいます。

さらに、カエデの葉を活用した飲料「カエデのラムネ」を創出し、売上金の一部を県及び秩父市に寄付しています。



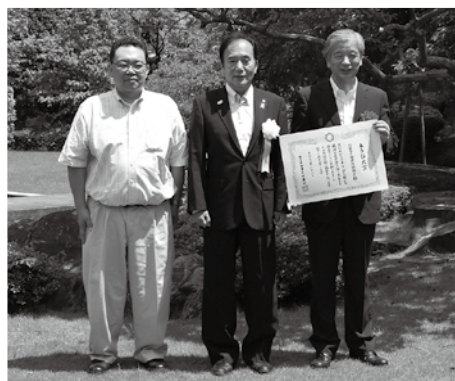
秩父カエデ糖を使用したお菓子

#### 三 本多静六賞表彰式

表彰式は、平成二十八年八月二日に知事公館で行い、上田知事か

ら町田会長に表彰状と賞金が贈られました。

上田知事は挨拶の中で、協議会の名称とその功績を、職業の道楽を説いた博士の人生訓に重ねて称え、これからも面白お菓子く、楽しみながら道を究め、活力ある地域づくりの原動力となるよう期待を込めました。



表彰式の様子

#### 四 終わりに

博士の生誕百五十年にあたる今年(平成二十八年度)、本多静六賞は節目の第十回を迎えます。

県ではこれからも賞の表彰を通じて、博士を顕彰するとともに、緑と共生する社会づくりに取り組んでいきます。

引き続き皆様の御理解・御支援をお願いいたします。

## 本多静六記念館企画展

「人生即努力 努力即幸福  
—本多静六博士の人生訓—」  
について

久喜市教育委員会文化財保護課  
係長兼学芸員 池尻 篤

本多静六記念館では、平成二十九年一月二十九日(日)から三月二十六日(日)まで、館内の菖蒲地区の文化財展示を一時的に改装して「人生即努力 努力即幸福—本多静六博士の人生訓—」と題



本多静六記念館での企画展示のようす

する企画展を開催しました。

博士は、自身の研究分野であった造林学や造園学のみならず、蓄財術や人生訓など様々な著書を世に出したことが知られています。

武田正三氏の『本多静六伝』(昭和三十三年・埼玉県立文化会館発行)には、博士の編著書として三百七十六冊が紹介されていますが、そのうち人生訓を含む教養書として五十三冊が紹介されています。これらの著書のなかには、その後も再版を重ねているものや、そのなかに書かれている言葉を他人が引用している場合などがあり、現代に生きる私達にも今なお博士の考え方を伝えてくれています。

本企画展は、博士の晩年にあたる昭和二十五年(一九五〇)に発行された『新人生訓早分り』に紹介されている人生訓を中心に、博士の人生に対する考え方をわかりやすく紹介したものです。展示では、博士の著書を紹介するとともに、人生訓をパネルで紹介し、その下に解説を付しました。展示で紹介したのは十二の人生訓ですが、紙幅の都合もあるので、ここではそのうち三つの人生訓について詳しく紹介します。なお、人生訓の

解説は『新人生訓早分り』で博士が書いたものをベースにしていますが、古い言い回しなどがあるため小学生でもわかるように現代語訳して意識した部分があります。そのため、博士の言葉そのものではありません。

### ◎人生即努力 努力即幸福

人間が生きているということは、心で考えたり、身体を動かし働かせたりすることであり、この心の働きと身体の働きを合わせて一般に努力といっています。つまり努力は、人生の本能であり自然であり、全てです。大人の場合、この努力は、仕事(職業)を通じて、勤労という形であられます。

幸福の真価は、努力をしている人のみがわかるものです。

### ◎人の短をそしる勿れ己の長をほこる勿れ

人の欠点が見えるときは自分の心が曇っているからだと思い、自らを顧みて心を改めれば、欠点に見えていたことが利点に見え、自らも幸福となります。

また、罪を憎んで人を憎まないようにすれば、世の中に嫌な人・

嫌いな人はいなくなり、みな良い人・好きな人ばかりになって、自分もまた世間から好かれるようになり、幸福な人になることができます。

### ◎名利を求むるな

努力が人生の全てですから、人間は一生努力を続けてさえいけばいいのです。名利(名誉や金銭)は人生の目的ではなく、仕事を道楽としていれば求めなくても自然とほかから与えられるものであり、いわば「職業道楽の粕」です。自ら求めた名利はやがて苦痛の種子となりますが、与えられた名利はさらに高い名利を生んでくれるのです。

### 企画展で紹介したそのほかの人生訓

- ◎職業道楽
- ◎働学併進
- ◎苦難の谷 歓楽の山
- ◎物の完全と充分とを求むる勿れ
- ◎天才よりも努力
- ◎運命の善用
- ◎理屈と人情の調和
- ◎耐乏生活
- ◎嫉妬の敵を避けよ

# ゆかりの地を訪ねて

日比谷公園・明治神宮

久喜市 中山 由美子

平成二十八年十一月十日、朝は今秋一番の冷え込みという寒空の中、本多博士を慕って集われた皆様方と、ゆかりの地訪問に心を弾ませて参加させて頂きました。

（連載 本多博士没六十年記念から転載）の資料を、参加者が順番



明治神宮を見学する参加者のようす

に読みながら、博士の生い立ちや業績、処世訓を学び、読み終える頃には最初の目的地日比谷公園に到着していました。

色づきはじめて木々をゆつたりながめながら、案内された「緑と水の市民カレッジ」内にて公園担当の方から説明を頂き、その中で、今年が博士生誕百五十年という記念すべき年であるという事、その企画展を監修された進士五十八先生（福井県立大学長）が「本多先生は並の学者ではない、もっとスケールの大きな方。そして何よりスゴイことは人を育てた事。精神（考え方）はずっと残っていく」と言われたと伺い、短い言葉ですが心に残りました。その後園内を一周しながら博士に関するエピソードを交えて丁寧の説明させて頂きました。

中でも、公園のシンボルである「首賭けイチョウ」と呼ばれる大イチョウは、公園造成中、公園前の道路の拡張が決定され、樹齢四百年を超える大イチョウが切り倒されることになった際、博士はなんとかしてこれを助けたいと思い、東京市参事会の議長に伐採の中止と、移植の引き受けを懇請、ご自

身の首を賭け、移植を成し遂げたというもので、その存在に圧倒されると共に、公園づくりに込められた博士の精神がここに生きていくという印象を受けました。

久喜市出身の偉人、本多静六博士の偉業を体感することができ、日比谷公園について新しい見聞も広がり、有意義な公園視察でした。

久喜市 奥澤 彰

イチョウの葉が黄色に色づきはじめて十一月十日私達は、郷土の偉人、本多静六博士ゆかりの地、日比谷公園と明治神宮の森を訪ねてきました。公園では、東京都公園協会の職員の方に公園を案内していただきました。バスで再び移動して、明治神宮に到着いたしました。

大鳥居に拝礼して、参道両側の森厳な樹木群を通って神社の社務所につき、職員の方から説明を聞いて、普段入ることの出来ない厳守な苑内を案内していただきました。檜、椎の木、楠木等の広葉樹をはじめ、檜木や榎などの針葉樹等、百年の進化の過程を詳しくお話しいただきました。又毎年この社の中の大木で繁殖しているオオ

タカについて、貴重な経験談を聞いて、参加された皆さんは大変感動いたしました。

明治神宮は、明治天皇と昭憲皇太后を祀る為に全国からの奉紀建設要望の声を受けて、大正九年に建設され、全国から約十萬本の献木も募り、勤労奉仕によって植えられたものとされており。本多静六博士はこの国家的プロジェクトの中心になり、その役割を担っていました。

本多静六博士が計画した神宮の森は、人間が新たに苗木を植えたり、種子をまいたりすることなく、自然に森林を更新させ、自然林に近づける手法でできました。博士はこれを、ドイツ留学時に学んだといわれています。

この考え方は、現在も生きていて、森苑の落ち葉の清掃は、参道や神殿の周辺だけで、森苑の落ち葉は全て、森に戻すようにしているそうです。七十ヘクタールある広大な敷地には庭園もあり、その隅には、岐阜の春日村から寄贈された「さざれ石」が鎮座まじまじておりました。明治神宮の森は、都会の中心地にありながら、日本の原風景を残した森であります。

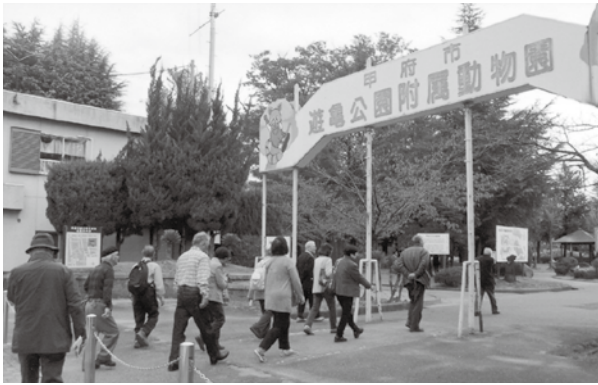
### 遊亀公園・舞鶴城 公園を見学して

本多静六博士を顕彰する会  
清水 ひとみ

平成二十八年十月二十八日早朝  
本会役員十三名は菖蒲文化会館を  
出発いたしました。

本会庶務部長の蓮実氏の司会で  
柴崎会長の挨拶の後に車内研修会  
本多静六記念館内にあるパソコン  
のデータベースからの資料を順に  
読み下準備としました。

「遊亀公園」は甲府市に明治七  
(一八七四)年に開園し、甲府城



遊亀公園を視察研修しているようす

跡にある「舞鶴公園」(当時)に対  
して命名されました。大正八年  
(一九一九)には公園附属の動物  
園が開園となりました。遊亀公園  
附属動物園は日本で四番目に古い  
と言われている、あまり広くはあ  
りませんが、動物をより近くで観  
察でき、だれでも気軽に楽しめま  
す。入園料は大人が三百二十円で、  
子どもは三十円の安さです。保育  
園の子どもたちの姿を見かけまし  
た。我々大人も充分に楽しめます。

本多静六博士の精神である「し  
たしみ・ふれあい・やすらぎ」を  
実感することができました。  
公園の近くで昼食をとった後、  
一行は雨の中、「舞鶴城公園」を目  
指しました。

舞鶴城公園は県指定史跡となっ  
ており入館料は無料です。甲府城  
跡が舞鶴城公園として親しまれて  
います。舞鶴城という名称はいつ  
のころからか白壁が重なり合う優  
雅な姿から、鶴が舞う雄大な姿を  
連想してつけられたといわれてい  
ます。現在は六ヘクタールが都市  
公園となっていますが、かつては  
二十ヘクタールほどの広大な城郭  
でした。

甲府城は、豊臣秀吉が天下統一

をした後、秀吉の名で築城され、  
浅野長政・幸長父子によって一六  
〇〇年頃までに完成しました。

江戸時代中期には大火により  
本丸御殿などが消失しました。明  
治時代に入って廃城になると主な  
建物は取り壊され、その後明治三  
十七年(一九〇四)に本丸周辺が  
舞鶴公園として公開されるよう  
になりました。現在は城跡の一部が  
舞鶴城公園、甲府市歴史公園とし  
て開放されています。

舞鶴城公園は、現在「日本歴史  
公園一〇〇選」「日本一〇〇名城」  
に選定されています。

本多静六博士が「都市公園と甲  
府市公園並に遊亀公園改良計画概  
要」を発表したのは大正十二年(一  
九二三)頃のことでした。

公園の中を登っていくと、市内  
が一望できる場所があります。晴  
天であれば富士山が望めるよう  
ですが、雨のため想像のみで終わ  
りました。残念です。

この公園でもボランティアの方  
に説明をしていただきました。私  
達も本多静六記念館で説明ボラン  
ティアをしておりますが、説明を  
受ける方の思いはどんなものか考  
えさせられる研修となりました。

### 編集後記

平成二十八年(二〇一六)は本多  
静六生誕百五十年の年でした。

本多博士は、造林学・林政学  
者であり、あわせて日本の大学  
で初めてランドスケープ・アー  
キテクチャ(近代造園学)を  
開講しました。東京大学で大正  
五年に景園学、大正九年には造  
園学の名称で講義が始まったと  
のことです。近代日本造園学会  
長として草創期の造園学をリ  
ードした造園学者でもあります。  
また、林学・造園学の社会的展  
開でもある森林の風致的利用を  
行いました。さらに、国立公園  
運動をはじめ観光開発など、地  
域振興がらみの計画設計プロ  
ジェクトも、全国七十ヶ所に及  
びます。

現在日本で要請されている地  
方創世指導の先駆者でもあった  
ということですが、  
郷土の偉大な先輩に改めて、  
敬意を表したいと思います。

【編集発行】本多静六博士を顕彰する会  
(窓口)

久喜市役所企画政策課  
〒346-8501 埼玉県久喜市下早見85-13  
電話 0480-1221111(代)  
久喜市菖蒲総合支所総務管理課  
電話 0480-1851111(代)